2A-1-1

環境との結びつきに焦点を当てた作業療法介入
－鬼瓦職人の役割変化－

佐藤瑛梨奈　齋藤　佑樹
財団法人太田綜合病院附属太田熱海病院

【緒言】

入院などにより住み慣れた地域を離れて生活する対象者は，心身機能や動作能力だけでなく，多くの役割を喪失している場合が多い．役割は，生きがいや習慣，特定の環境における立場や居場所など「その人」の性質を構成する重要な要素であり，機能や能力の回復と並行し，役割の再獲得に向けた介入は非常に重要である．

今回作業療法士（OTR）は，重度の右片麻痺事例を経験した．事例は周囲との交流を拒み，リハビリテーション（以下リハ）に対して消極的であった．

この事例に対し，病前大切にしていた作業を媒介にしながら，現在の身体機能や能力を考慮した新しい役割の再構築を図った．結果，交流や日常生活活動（ADL）に対する主体的で肯定的な変化がみられた．役割再獲得による事例の変化について報告する．

【事例紹介，作業療法評価】

70歳代男性A氏．妻と二人暮らし．自営業（瓦職人）．診断名は脳梗塞で，重度右片麻痺・構音・摂食障害を呈していた．活動面は，機能的自立度評価法（FIM）27点．運動項目ほぼ全介助．食事とリハ以外の時間は臥床していた．A氏は「手が動けば何でもできる」との想いが強く，習得モデルでの介入に対し消極的であった．本人や家族との面接を通して，A氏が東北でも数少ない鬼瓦職人であることが分かった．また，自分が遂行してきた仕事に対して，強い自尊心をうかがわせる語りが目立った．

【臨床的推論と目標設定】

ADL全介助で自己統制が取れない状況に加え，入院生活という病前の作業遂行文脈と全く異なる文脈の中で大切な役割を喪失している．結果，無為な時間を過ごすことが習慣化し負の循環が形成されていると考えた．

これらの推論から，セルフケア能力の向上や大切な作業の遂行を通して自己統制感や自己効力感の向上を図り，それらの相互作用による良循環の構築やアイデンティティの再獲得を目標とした．

【経過】

ADL訓練や要素的動作訓練と並行して鬼瓦の図案制作を導入した．結果OTRとの会話量は増加したが依然として他者との交流は殆ど見られず現状に変化は見られなかった．そこでOTRは過去の作品を家族に持参してもらい，他者に見てもらう機会を提供することにした．

目に付きやすい場所に作品を設置し，他スタッフに作品を介した声掛けをしてもらうよう要請した．しばらくすると他患からも鬼瓦について話しかけられる頻度が増加し，A氏は鬼瓦職人として有名人となった．序々にA氏から他者に話しかける機会が増加し，次第に他者を楽しませる様子が観察された．日中自ら離床を希望する頻度も増加し，無為な時間が減少した．ADL訓練も以前より積極的に取り組むようになり，優位に介助量の軽減が見られてきた．

【考察】

役割とは作業的・認識的側面で構成されており，両側面が伴うことで人は役割を獲得することができるとされている．A氏にとって鬼瓦作りは人生の誇り，楽しみなど色々な意味があり，また役割的側面に目を向けると，鬼瓦作りは自己促進的で生産者役割を担う作業であった．当初の介入は確かに鬼瓦を媒介にしてはいたが，生産者役割を構成していた作業の一部をそのまま導入しており，障害を背負い生産者役割を担うことができない事例に対して，肯定的な変化を与える介入になっていなかったと考える．そこで鬼瓦を媒介にしながらも，現在の事例が担える役割として，過去の作業歴や就労実績を他者に伝える功労者役割を獲得できるよう介入内容を変更した．この変更により，事例は鬼瓦職人という大切な役割を，現在遂行が困難な生産者としての側面ではなく，自分の過去の業績などを他者に伝える功労者としての側面を含んで役割として果たすことが可能になり，結果，生活全体を良循環に転換するきっかけを作ることが可能になったと考える．

【結語】

意味のある作業とは，人が環境に結びつくために必要な役割や課題など色々な要素を含んでいる．今回の経験を通して，対象者の大切な作業を単なる固有の活動として捉えるのではなく，その作業の役割的側面を考慮する重要性を再認識した．